



はじめのいっぽ

平成29年度 平成 29 年 8 月 30 日
9月号 幼保連携型認定こども園
東野田ちどり保育園
江川 永里子

「残暑お見舞い申し上げます。」

今年の夏も…連日猛暑でした。安田式プールが大活躍し、「晴れたらプール！」と21回入りました！！
夏野菜も豊作でした。天ぷらなどに調理してもらい、おいしくご馳走になりました。
心地良い秋！！が、まもなくやってきます。あと一息暑さに寄り添いながら過ごしていきます。
保護者の皆様におかれましても、夏の疲れが出ませんように、ご自愛ください。



～ アドラー より ～

どんな場合に子どもは適切な行動をするか

子どもが適切な行動をしているとき、かならずしも子育てがうまくいっていると安心することはできません。なぜなら、次のような3つの場合が考えられるからです。

1. 罰を恐れて適切な行動をする場合

子どもが勉強しないと激しく罰することにします。そうすると、子どもは勉強するかもしれません。「勉強する」というのは適切な行動だと思います。しかし、いつまでたっても子どもは勉強が好きにならないかもしれません。また、罰することをやめると、たちまち勉強をやめてしまうでしょう。

伝統的な育児や教育は、しばしば罰でもって子どもを動かしてきました。この方法は、即効性はあるかもしれないのですが、長期的に見ると、とてもまずい方法だと思います。

2. 賞を求めて適切な行動をする場合

たとえば「試験で100点をとったら、ごほうびにおもちゃを買ってあげるわね」と約束したとします。そうすると、子どもは喜んで勉強するかもしれません。「勉強する」というのは適切な行動だと思います。しかし、子どもは、おもちゃ(賞)をもらうために勉強しているだけで、勉強することのほんとうの意味がわかってしているわけではありません。ですから、親の気が変わって、賞をあげないことにすると、たちまち勉強しなくなってしまうでしょう。

ある種の心理学は、「ほめて育てよう」と言います。しかし、それも、<子育ての目標>から考えると、あまりよい方法ではないように思います。

3. 適切な信念にもとづいて適切な行動をする場合

アドラー心理学がめざしているのは、子どもが適切な信念、すなわち、

- 1)私は能力がある。
- 2)人々は私の仲間だ。

ということを感じていて、その結果、適切な行動をすることです。これは、罰を恐れている場合や賞を求めている場合とは違って、子どもを動かしている力が子どもの内側にあります。ですから、ほんとうの意味で子どもは自立しているのです。